

「留学」の先を見据えた日本語教育

Japanese Language Education Considering Learning After Study Abroad

丸山千歌, 小澤伊久美
MARUYAMA Chika, OZAWA Ikumi



Key words: 留学体験、日本語教育、縦断研究、日本語力、授業デザイン
study abroad experience, Japanese language education, longitudinal
research, Japanese language proficiency, curriculum design

Abstract

This paper is a part of longitudinal research by PAC analysis that attempts to investigate how exchange students from the UK who are learning Japanese language respond to Japanese reading texts. This paper focuses on one student among eight participants in the research, and analyzes (a) which images concerning Japan he recalls as a reaction to the texts, and (b) how he uses Japanese language when describing his thoughts about the images stimulated by the texts. Based on PAC analysis interviews and face sheets, this paper points out the following: (a) the learner observes Japan relatively, despite the stereotype seen in the text he reads, which agrees with findings in previous investigations, and (b) even though he actively interacted with Japanese people and things related to Japan, his Japanese language proficiency did not show remarkable improvement, which may be caused by his learning style as well as his lack of descriptive skills. As a result of this investigation, this paper finally proposes the necessity of Japanese language education in Japan, which puts into perspective the learning following a return from study abroad.

1. 研究の背景と目的

留学プログラムの教育的意義や効果に関する論考には、外国語運用能力の向上 (Regan, Howard, & Lemée 2009 他)、異文化理解や異文化適応そして人間としての成長 (工藤 2009、池田 2014 他) など様々な観点がある。筆者らは、これまで日本語教育の教材開発と授業実践に生かすことを視野におき、日本語学習者に対する留学前・中・後に渡る縦断研究に取り組んできた (丸山 2007、丸山・小澤 2011a、2011b 他)。具体的には、日本語学習者が日本の社会や文化に関するステレオタイプ的な読解教材を読んだ場合、その読解教材からどのような影響を受けるのか、またその影響は学習者の属性、留学体験といかに関わるのかを探る試みで、①日本人との接触や日本体験のありようを見て、読解教材から発想するイメージの相違を質的に分析した点、②個人差が大きく、統制をかけた調査をしにくい中級レベルの学習者を対象に、個人の変容に着眼した質的研究でありつつも同一要素を持つ調査協力者 (以下、協力者) 複数の事例を扱っており、比較が可能である点に特徴がある。しかし、このように、留学体験に関する調査を踏まえて留学中の日本語教育について論じる試みは管見の限りほとんどない¹⁾。

本稿は、学習者要因についての筆者らの一連の研究を整理した上で、これまでの研究で取り上げた事例とは異なる特徴を持つ協力者 C に焦点を当て、C が読解教材から発想した内容や、その内容がどのような日本語を用いて表現されたかに関して考察する。そして、C の事例を踏まえ、「留学の先」を見据えた日本語教育の必要性を提案する。

2. 先行研究

丸山・小澤 (2011a、2011b) は、日本語学習者がステレオタイプ的な読解教材を読んだ場合、どのような影響を受けるのか、またその影響は学習者の属性、留学体験といかに関わるのかを PAC 分析法 (内藤 2002) を用いて縦断的に調査し、質的に分析したもので、①渡日前に教材から発想したステレオタイプ的なイメージは留学体験の有無だけでは変わらないこと、②イメージの変容に影響を与える要因として、留学体験がその学習者にとって新味を持つかどうか、留学中に日本人などとの心に残る接触体験があるかどうか、を指摘した。

その後、筆者らは、調査時期を 1 年間隔に拡げる、連想刺激とする読解教材を協力者自身が選定した 1 種類に 3 回とも固定するといった形で調査方法に改善を加えた上で、英国からの留学生 8 名を対象に新たな縦断的調査を実施した。丸山・小澤 (2013、2014) は、そのうち、日本語レベルや日本語学習環境がほぼ同一で、渡日前の留学経験の有無が異なる 1 年交換留学生 A と B を取り上げ、2 名が読解教材から発想するイメージの変容の相違には、日本への留学が初めての留学経験か否かが影響を与えている可能性を指摘した。

以上の先行研究は、日本語学習者の留学という経験が、日本語の読解教材との向き合い方どのように影響を与えているかを見たもので、特に日本語力そのものに注目したものではなかった

が、協力者に共通した傾向として観察されてきたのは、留学前よりも留学中、留学後のほうが、日本語力が向上しているということであった。それは協力者自らが選択する調査時の使用言語が、留学前は英語であったのが、留学中・留学後は日本語になるということや、エピソードを叙述する際により高度な文型を適切に使用するようになったことやより多様な語彙を使用することによって観察されてきた。しかし、協力者Cは日本語力が大きく向上した様子が観察されなかった。そこで、本稿ではCが留学前・中・後の各時期に読解教材から発想した内容とその表現について、日本に関するモノゴトへの関わり方を踏まえて論じることとする。

3. 調査概要

3. 1. 調査協力者

協力者は、英国からの1年の交換留学生（男性）Cである。高校卒業後約3年間の仕事の経験を経て、日本へ行くことを考えて大学に入学した。専攻は日本語で、日本語を専攻することにしたきっかけは、庭師である祖父が世界で一番好きな庭園は日本庭園だったという話を祖母から聞いていたことにあると語った。その影響からテレビで日本の観光に関する番組を視聴したことや11歳のときから日本人と文通を始め現在でもfacebookでコンタクトをとり、実際に会うなどしたことが日本語学習につながったと振り返っている。日本語学習歴はインタビュー開始時において、大学で1年半（週10時間）、日本語力は中級前半であるが、高校生のときにインターネットを活用して独学で日本語学習を開始しており、大学入学時には日本語既習者コース（以下、既習者コース）に入ることができた。大学で1年次に使用した教科書は『みんなの日本語』である。日本語未習の学生対象のコースはこの教科書を週2課のペースで進むのに対しCが履修した既習者コースは週4課と2倍のスピードで学習が進む。日本には2009年に旅行で4ヶ月滞在、2010年に友人に会うために1ヶ月滞在しており、今回の留学が3回目の滞日経験となる。

3. 2. 調査の手続き

調査は、短期留学プログラム約半年前の2012年3月に英国で、また短期留学プログラム開始から約半年後の2013年3月に筆者らの研究室で、そして短期留学プログラム終了から約半年後の2014年3月に英国で実施した。調査時間はそれぞれ約4-5時間、そのうちインタビューに要した時間は1-2時間である。

全ての発話は協力者の許可を得て、ICレコーダーに録音した。使用言語は、本来は協力者が思っていることが自由に表現できるよう母語で行うことが適切であるとされている²⁾が、今回は本人の希望により状況に応じて使用言語を選択することとした。その結果、調査時の使用言語は、留学前の調査は主に英語で、留学中の調査は主に日本語、留学後の調査は主に英語という結果となった。C以外の協力者は調査時の使用言語が留学前は主に英語で、留学中と留学後は主に日本語だったこと、Cの発想内容が他の協力者と比べて特に抽象的で難しかったわけではないことが

ら、Cは他の学習者と傾向が異なると言えよう。

協力者が踏んだ手順は丸山・小澤（2013）と同様で、刺激となる読解教材は留学前の調査段階でC自身が選択した結果、石川他（1993）『日本語 2nd ステップ』の第 19 課の「酒」を 3 回とも用いることになった。連想刺激文は筆者ら 2 名で検討し作成したもので、「これは外国人のための日本語の教科書です。あなたはこの文章に書かれている日本について、どう感じましたか。あなたの感じたことを、言葉やイメージで表してください。書く時には思いついた順に、順位の番号をつけてください。」である。

3. 3. 日本に関するモノゴトとの接触状況 — フェイスシートの情報から —

また、PAC 分析に加えて、丸山・小澤（2008）に基づき、日本に関するモノゴトとの接触状況についての質問を加えたフェイスシートを使用し、PAC インタビューの休憩時間を利用してフェイスシートへの記入を依頼した。質問項目は、留学前と留学中、留学後とで日本・日本人に関する情報へのアクセスの経路、頻度、情報の内容の変化を追うことを目的とし、具体的には、メディア（新聞・雑誌・インターネット・TV・その他）、人間（家族・友だち・教師・その他）、日本語のクラスへのアクセスの頻度、重要度（重要<5>から重要ではない<1>の 5 段階評価）を尋ねた。その結果が表 1 である。そのフェイスシートを見ながらその場で補足質問的なインタビューを行った結果わかったことを以下にまとめる。

表 1 日本に関するモノゴトとの接触状況について

	留学前		留学中		留学後	
	アクセス頻度 (接触対象)	重要度	アクセス頻度 (接触対象)	重要度	アクセス頻度 (接触対象)	重要度
メディア：新聞・雑誌・インターネット・TV・その他_____	週 3-4 回程度 (ネットで映画視聴)	4	週 3 回程度 (ネットでニュース、youtube)	2	週 2 回程度 (TV・映画・音楽)	3
人間：家族・友だち・教師・その他_____	週 3-5 回程度 (友達：chat, mail)	5	1 日 1 回程度 (友達・教師：直接)	5	週 4 回程度 (友達・教師：直接)	4
日本語のクラス	週 3 回程度	1	週 2 回程度	3	週 2 回程度	4

留学前、Cはメディアへのアクセスは週に3-4回あり、日本の映画を観ると話し、例として「きらきらひかる」「トニー滝谷」を挙げた。日本人との接触は、英国の大学にいる日本人留学生と週5回程度、日本にいる友人と週3回程度あり、英語での会話と同じように何でも話すとし、重要度も5と高い。メディアや人との接触からの日本に関するモノゴトへの接触を積極的に行っており、本人にとってその重要度が高いことがわかる。その一方で、日本語のクラスについては「今は日本語の勉強は好きじゃない」とし、「教科書だけ使ったらつまらない」「教科書以外のこともやりたい」と話し、「(大学に) 入学する前、日本語の興味があつたが、今は仕事みたいに」な

っていると評価する。その原因には大学で課される宿題が「自分で勉強したくないほど多い」ことにあるようである。6歳のときにドイツ語学習を始め、自らの関心により独学で日本語学習を開始しているC独特の学習スタイルがあり、それと大学の日本語学習の進め方が合わないと感じていることが窺える。

留学中は、3回引越しているが、いずれも日本人の知人と同じ家に部屋を分けて住むシェアハウスに居住し、日常的に英語と日本語を併用する生活をしてきた。メディアを通して日本に関する情報への接触の頻度は、留学前と留学中とで変わらないが、日本人との直接の接触のほうが重要だとし、メディアの重要度を低く評価する。日本人との接触はシェアハウスの他、大学のサークルがある。留学直後に奏琴サークルに入ったものの、練習重視のサークルの雰囲気は、音楽そのものを楽しみたいというCの価値観に合わなかったと述べている。そのため1年続けずに辞め、その後はゴスペルのサークルに入った。このサークルはとても楽しく、良い友人も出来たという。履修した日本語のクラスは、本人の予想よりも高い上級コースに配置され、学期に1コース、3学期で3段階のコースを履修した。各学期は10-11週あり、秋は週5時間、冬は週4時間、春は週3時間だった。秋冬は内容重視型で4技能の運用力を高めるクラス、春は書き方とプレゼンテーションに特化したクラスで、8000字のレポートに取り組んだ。春のコースは履修者は2名のみだったが、日本語教授法の学生がディスカッションに参加した。こうした日本語のクラスの重要度は留学前よりも高く、授業の難易度が高いと述べている。最終学期は履修者自身が関心を持つ話題について話したり発表したりした後、Cはそれを「音楽、それとも noise」というレポートにまとめたという。日本語クラス以外にドイツ語、水泳、演劇、アジアの音楽、人類学など英語による講義も含めて様々な講義を受けている。また、1年間の滞在中に3度の農作業ボランティアに参加しており、人口80名の島に滞在したこともあると語った。

留学後は、メディアによる接触は週に二回ほどあり、面白いものの重要ではないと述べ、留学中よりは高いが留学前よりは低い「3」であるとした。人間との直接の接触については、日本人の友だちがヨーロッパ旅行の際に自分の家に滞在すること、日本語のクラスの同級生から各自の留学先での体験を聞いて面白かったことを指摘し、また、わからないことは日本語教師に聞いて明らかにできるという点で大事だと述べ、重要度はやや下がるものの「4」と評価した。日本語クラスについては、C同様留学から帰国した4年生が日本語の運用力をさらに高めることを目的としたクラスを履修している。これは週4時間で、内容重視型の部分と敬語に特化した部分とからなり、15-20名が受講していると言う。日本語のクラスは自分が母語でも嫌いな発表が課されるので大変だけれども、大事であると感じており、調査期間を通じて最も高い重要度である「4」をつけている。

4. 分析

本節では、Cの読解教材への反応とともに、発話から観察される日本語力を論じる。

4. 1. 留学前

Cが留学前に読解教材から発想した連想語は表2の通りである³⁾。連想語は10項目あるが、全て英語によって書かれている。

表2 留学前に実施したPAC分析の際にCが想起した連想語

CLの名付け	重要度	連想語	印象	
Just get on with it.	CL1: (人生全体の)期待	6	However, my young Japanese friends say that they are still expected to drink with their colleagues if asked, as it is regarded as part of work and not doing so can damage your relationship with colleagues, which is detrimental to promotion.	-
		10	Younger people, as it seems with many customs are moving away from tradition to be more in line with western culture. i.e. having separate personal and work lives.	0
		3	It's tough if workers are expected to get drunk, stay out late, then arrive early to work the next day with a hangover. Surrely their performance would suffer in the short term and long term as lack of sleep and fatigue would harm worker's health, preventing them from working.	-
	CL2: 毎日	5	Japanese culture is clearly one of defined social customs. There are expectations for what to do in certain situations, especially these pertaining to work/ employment.	0
		8	There's obviously a "work hard, play hard" mentality. i.e. work too much → drink too much.	0
		4	But I understand that it is this way (重要度順7の項目) because work takes up more of a Japanese person's time and workers are more involved (loyal) to companies.	0
	CL3: Race	1	Having a good relationship with your boss and coworkers doesn't necessarily make you good at your job or vice versa.	+と-
		7	You shouldn't refuse a request from a boss/colleague when asked to go out drinking. (This would be too personal/unprofessional in the UK or USA etc.)	0
		2	Personally I can see the benefit of such a practise, but there is a risk of senior coworkers abusing their authority/power. Also it's hard for some people to control what they say when drunk.	0か-
CL4: Lables and boxes	9	Japanese LOVE set phrases and sayings. e.g.「酒の席は無礼講」and having such phrases seems to validate the action in terms of being a social custom.	0	

日本についてのステレオタイプのな読解教材に接したときに、相対的な視点をもって教材に向き合うことができるかどうかは、単に留学体験の有無によるのではなく、留学体験がその学習者にとって新味を持つかどうか、留学中に日本人などとの心に残る接触体験があるかどうかを鍵になることは、丸山・小澤（2011a）が指摘しているが、Cは過去の渡日経験の影響もあるのか、留学前から一定の相対的な視点をもって読解教材と向き合おうとしていることが観察できる。

例えば、“Japanese love set phrases and sayings, for example,「酒の席は無礼講」and having such phrases seems to validate the action in terms of being a social custom.” という本人の連

想語からイメージすることについて尋ねたところ、例1のように他の文化にも言及しながら、何事も単純化して考えをまとめなければ何も理解できないのだという一般論を展開している。

例1：これは日本のだけじゃありません。でも日本は多分他の国は日本より好きでも、他の国の文化、分かりません。イギリスより、ドイツより、韓国は、日本に似ている。set phrase, like, saying, like マイペース these things. Uh, I don't have an explanation, I just, I know Japanese loves sayings maybe. But it's human, people, for people to understand something, for it to be real, most people, they need a word, or, something, otherwise, they can't, they can't comprehend it, it's just the way people think.

また、Cは1つ目のクラスター（以下、CL）と2つ目のCLの共通点するイメージとして例2のような発話を行い、日本についての読解教材から想起した連想語から、生きとし生けるもの全てに通じる、より普遍的で抽象的な考えを述べている。

例2：2番目のグループは、生活、生活、生活？（生活）⁴⁾ 人生（人生）人生の難しい事。1番目は習慣、慣習？（習慣）習慣。習慣が変わっても、期待があります。いつも期待があります。（うんうん）動物も期待があります。命のじゅう、じゅう、criteria?（基準）基準、が期待。maybe. 意思、期待、変わりません。（うん、はいはいはい）it just exists. But even a virus, if it wants to survive, it has to do things, it has to infect a cell and spread and you know, there's vaccines, if it wants to survive, it had to mutate, adapt. Um, if a wolf wants to eat or feed it's young, it has to kill sheep or something. So there's always expectations, even if people's customs are different.

“Younger people, as it seems with many customs, are moving away from tradition to be more in line, in line with western culture, having separate personal and work lives.”という連想語は何を参照したものかを尋ねたところ、例3のように、本人が英国や日本で実際に見聞きした経験であることを述べ、読解教材からの情報を鵜呑みにせず、本人の経験を検証するなどして、相対的な視点を持って情報と向き合う姿勢が観察される。

例3：I used to work in a restaurant with Japanese boss and Japanese colleagues. They seemed, not too, not too strict. For example, we used, first name – san, instead of last name. But it's still, it's still polite. Like, …, Aya-san. Like, this is the same as the UK was, I worked in a bank, older colleagues always told me, if you worked here 30 years ago, the bank manager would be like, really high, “Good morning Mr, Mr Smith, How are you today?” You know, you don't have a conversation, this person is your boss. But now, you

call them by first name you can have, you can joke and laugh, as long as you are doing your job. But if you are not doing well, of course, you're gonna receive.

丸山・小澤（2007、2011a、2011b）は渡日経験がなく、日本語学習者にとっての日本留学が初めての留学経験となる場合、留学前の調査では、読解教材からの情報をそのまま受け取る傾向が見られることを指摘した。Cが相対的視点を持っているのは、単に渡日経験があることのみが要因ではないと言える。それは、上述の通りCが幼少時から自らの関心から外国語学習を始めるような資質を持っているということと、例3の後半の発話に表れているように多様性と日常的に向き合う環境に居住していることなども要因になっていることが考えられる。

次に、Cの留学前の日本語力について見てみると、例1、例2からも窺えるように、文レベルで単純な文型を用いた日本語は使えるが、本人の経験や知性に基づく、より抽象的な内容についての発話はほぼ英語で行われる。発話中の語彙の選定も、例2や例4のようにCが適切な語を選びながら日本語で話そうとしている姿勢を察して、聞き手である調査者が、文脈上本人にとって適切であろうと思われる語を紹介し、それによって発話が継続していることが観察できる。発話によって達成しようとするタスクは、日本についての経験や情報から、一般論や、より抽象的なことを伝えるもので、OPIで言う上級レベルの内容であるが、実際の発話は文レベルにとどまっている状態であることがわかる（牧野他、2001）。

例4 : some people struggling, some people they're fine, they have no problems. Even, you know sometimes I said, you can run with someone, somewhere. Sometimes, these people are good, but sometimes maybe, they look good, but they're going to trick you. They, maybe they're smiling, but really, they're going to pull you to their finish line. And this is when you have to, let go. And some people honestly, they want to help you, so they're going to go where you want to go. (うん) And people's faces are just like everyone's faces. No one is bad, or no one is good, but people are just trying to get to where they want to go. (中略) People of the world. 黒人、白人、黄色人、(褐色人種) 褐色人。(人種) 人種、brown, everyone, just the people you're going to meet. (うん) maybe like if you go on a street in X⁵, just got lots of like this, this is …

4. 2. 留学中

Cが留学中に読解教材から発想した連想語は表3の通りである。全部で16項目あるが、全て日本語で書いている。

表3 留学中に実施した PAC 分析の際に C が想起した連想語

CLの名付け		重要度	連想語	印象
お酒ー日本の酒に関係する習慣	CL1: Bigger picture	5	筆者の個人的な言いたいことがわからないのに、酒がつきあいといいということに賛成する。	0
		12	筆者の個人的な言いたいことがわからない。問題だというわけではないのに。	+
		4	自分の意見は何かを思わせる質問があればよかった。	0
		11	初めて読んだときに比べて、この文意について意見がわりとない。	0
	CL2: 「お酒」「飲む」	6	日本でAlcoholismが大きい問題と見ているか。	-
		9	日本で酒を飲んで車を運転するわけは多い？	-
		3	もっと科学的にお酒について調べたい。	0
		10	筆者が「つきあい酒」ということが日本の文化の中で大切だと思っていて、残したいかどうか知りたい。	0
	CL3: Duty drinking	1	どうしてほとんどの国でお酒が飲まされるが、他のドラッグの使用は禁止されているか知りたい。	-
		7	上士(じょうし)と一緒に飲むとき、だれが払うか。	0/-
		8	自分の好きな酒を注問していいか。	0/-
	CL4: Objectively looking	2	今飲み会かパーティに行きたいようになった。	+
		15	大学生の教科書にとってちょうどいい話題だと思う。	0
		16	初めて読んだら、新しい語句が適切だと思う。	0
		14	話題はかなりおもしろい。日本の文化についてのものだが、日本の文化だけではない。	0
		13	文章がそんなに長くないと思う。	0

「話題はかなりおもしろい。日本の文化についてのものだが、日本の文化だけではない。」という連想語に象徴されるように、留学中でも、日本や英国でのC自身の経験を参照しながら、読解教材に相対的な視点をもって向き合おうとする様子が観察できる。さらに話題を発展させて例5のように、C自身の読解教材との向き合い方を説明する際に、神の話題を持ち出してより抽象度の高めようとすることも積極的に行っている。

例5：どこにもいない。you, you can't be, I can't be everywhere in the room. I can only be in one place. Like …そん…たとえば、みんなは…クリスチャンは、神様は(うん)どこでも(うんうんうん)あります。でも人間はそれで、できません。So I can only, I have to choose(うん)。Like, どこに行きたいか、えら、選ばない、選ぶ必要がありますから、入った後(うん)、あ、これ、ここに(うん)、泳ぎたい、そのあとはここに泳ぎたい(うん)、そのあとはここに泳ぎたい(うん)。いつも(うん)、この読み物だけでなくいつも…なに、何かについて(うん)、考えたら、エッセイも(うん)、書くとき(うん)、あ、…

日本語力に関しては、例えば1つめのCLについての発話であるが、留学先の大学の日本語クラスでの日本語教師の問いかけのパターンに沿って、読解教材と向き合う様子が見られる(例6)。また「筆者」「判断」「話題」といった大学における中上級レベルで導入される語が使用できてい

ることが観察される一方で、自分の読みのプロセスを客観的に叙述するというタスクは達成できないと判断し、英語で説明する様子が観察でき（例7）、発話によって達成しようとするタスクはOPIで言う上級レベルの内容であるのに対し、実際の発話は文レベルにとどまっている状態であるという状況は変わらない。

例6：文章を読んで、きし…最近（うん）、Y⁶（うん）でいつも先生が、筆者と…の…言いたいことは（うん）なん…なん…何ですか（うん）と言ってるから（うん）、僕はたぶん…その…その方法で（うん）…判断的に↑（うん）読んでます

例7：…でも（うん）、順番は、（うん）あい…ほんとに間…間から、なんていう、話題について（うん）もっと考え…（うん）…なんていう…文章について（うん）、の、考えが、ないと、（うん）これから…どうする（うん）…とても難しい…んー、…すみません（あーいえいえ、難しいとき英語でも大丈夫ですよ）OK.ありがとうございます。Um-..., when I can't think...of things to, ideas about the actual reading ... like kind of take myself away from the reading and think on a broadest scale like what is she,（うん）lady maybe ↑ what is she trying to say, what do I think of this, and then maybe I can think of better questions（うん）, better actual questions about alcohol or something

また、連想語「日本で Alcoholism が大きい問題と見ているか。」に関連し、日本語の授業の教材が問題解決に向けた話題ばかりだと批判し（例8）、外国語学習は興味があって始めたのであって、その社会に存在する問題を認識し解決策を考えるために勉強しているわけではないと述べ、本人の興味と日本語教材の内容や日本あるいはアジアの教育システムとにずれがあることを指摘している（例9）。

例8：うん、なん、これは何で筆者が（うん）、お酒について書いてますか↑（うーんなるほど）いつも、僕の経験（うん）、で…日本の教科書でいつも、読み物は問題について like how, どうやって回復できま、回復↑なん（解決）、解決できますか（うん）。I think Japanese people like problem like, always thinking about problems, すいま、I don't want to be rude（うん（笑））。Just textbooks ... and so I thought, it must be a problem（うん）if you are writing about it（笑）

例9：そう。Just ... this is this, that's it. Just this, just talking for（ふーん）… interests（ふーん）I think, I never want to think about problems, I think, can I ↑（うん）I think, the Japanese education system is, not just Japan, in Asia, the way everything is done is like, standardize test. So you always have "correct" or "wrong", "correct" or "wrong", "correct"

or “wrong”, so this pattern, this kind of approach to … learning or academic, academia, you find it in not literature but you find it in this kind a history n stuff or sociology, it’s always there’s problem, how can we correct the problem (うん), like …

4. 3. 留学後

Cが留学後に読解教材から発想した連想語は表4の通りである。全部で25項目あるが、その半分以上は英語で書かれている。

表4 留学後に実施したPAC分析の際にCが想起した連想語

CLの名付け	重要度	連想語	印象
つきあいについてのわからないこと	24	British Culture is quite different from this.	0
	25	There should be some Izakayas in X.	-
	5	Many of my Japanese friends said they had never been to a nightclub, nor were interested in ever goin to one.	0
	2	Though, my friends seem to mention doing this more often, so perhaps this is a more global culture?	0
	3	日本以外の国でもやっているかわからない。韓国でやっている気がするのに…	0
	21	Do any companies in Japan have office parties in their offices?	0
	9	What do single parents do? Surely they must refuse... (and go home to their families)..	0
	22	Are partners, wives and husbands ever invited?	-
	11	Even though the drinking age is 20, regulation of the Laws seems much more relaxed in Japan. Nobody checks for ID.	-
	12	It must be hard for Japanese young people to meet outside of work or mutual friends if there are no western style bars.	-
	8	What about people that do not / cannot drink alcohol?	0
	4	日本人の若者はつきあい酒があんまり好きではなさそうだ。	0
	23	いつも働いている友達にこんな話を聞いている。	-
	7	Do they do this in smaller towns? Or just the big cities?	0
	CL2: anxious	10	Wouldn't you be worried about saying something wrong?
14		だれが上司のとなりにすわる？ だれが席をきめる？	-
1		ほんとうに、いっしょに酒を飲むことで、仕事のストレスを解消することができるか？	-
CL3: つきあいの ルール	13	お互いが好きふたりの間何かがおこる恐があるのではなだろうか。	-
	19	Why is beer heavily advertised towards women in Japan, but not say Cigarettes?	0
	20	日本にいたとき、なんで日本人はビールをよく飲むのにフらないかをよく思った。	+
	15	つきあい酒は一般的に何時から何時まで？	0
	17	1ヶ月何回これをやっている(もちろん、会社によって違うのに)	0
	16	Is つきあい酒 usually on a Friday?	0
	18	注問してはいけない酒があるか？	0
6	次の日に仕事があって二日酔いである場合はどうすればいいか？	-	

CL1 の連想語群から思い浮かぶこととして、日本の酒文化が海外のそれとどのように違うかを挙げ、そこで想起される東京の居酒屋のビジュアルイメージを語りつつ、日本でも小さな村の居酒屋はまた異なるのではないかとすることを挙げた。読解教材から日本と海外の飲酒文化の相違に考えを巡らせるだけでなく、「日本の居酒屋」という括りを避けるに留まらず、東京以外の大都市の居酒屋との違いとして捉えていることにも言及している（例 10）。そこには留学前から日本をステレオタイプで見ようとはしていない C の態度と、今回の留学中に C が農作業を体験した、全人口が 80 人しかいない島での生活の影響とが見て取れる。

例 10：[連想語の 7 番] は、付き合い酒、についてのこと。本当に、村、村ぐらいの、町に、事務所あれば、かい、会社の事務所があれば、その、働いてる、人々は、恐らく、みんな、はたら、その会社に入る前に、一緒に、知ってる、可能性、があつて、ですから、みんなはもう、みんなの関係はもう、決められました（んー、なるほどね、うん）そう、で、誰かが、良いことか悪い、悪いことをすれば、その村に住んでる、すいません、住んでる人は、その、何が起こるかを、聞いてて、んー…悪い結果が、起こる、恐れがあります。[中略] その上に、小さい町には、もちろん、居酒屋があります。居酒屋ぐらいの、レストランが、あり、ある、んですが…雰囲気、小さい町、小さい町に雰囲気が、違います。だ、誰もその、みんなは誰も、知ってますから、その、付き合い、付き合いに、誰も、来れる気がします [中略] Because, if everybody knows each other, in a small town, even you know, you know the, the owner of the 居酒屋, you are like, people like he's coming and go out, like, maybe, your cousins' or your friends', so, it's more like being at home but, that 居酒屋's in Tokyo, not just Tokyo, I mean big cities, it feels like, it's just another work, like continuation of work, like, argh, I wanna go home, I have, have things to do (笑)

CL3 では、自分が留学中に想起してしまったステレオタイプにも言及があり、留学中の日本に対する自分の眼差しについても振り返っている C の様子が窺える（例 11）。

例 11：19 番、の質問は、日本にいた時、何回も、思いました。Why all their adverts, is there, related drinking, beer. (うん…) なぜか言う、なぜと言う、と、い、イギリスでは、もちろん、い、今は、男性も女性も、ビールを飲む。でも、僕はまだ、おばあさんの、時代のイメージを、持ってて、その時に、女性は、ビールを飲むと、あんまり、feminine な、印象を、与えない、なくて、一般的に、日本、人の女性は、イギリスの女性より、ladylike だと、まだ思いますから、僕、たぶん、も、もちろん不公平な考え方です、ですが、その、女性は、もっと feminine だったら、ビールを飲まない、文化がある。たぶん、ビールは、ワインは、お、女らしいの、飲み物。ビールは、男。それは、子供、子供の考え方で、だ

と分かりますけど、消せません。もちろん、実際的には、半分半分。ワインも、男性、ワインを飲んでる男性も、半分ぐらい、いますけど、テレビは、一般的に、ステ、stereotype、を、見せ、見せてます、放送してます

一方、日本語力に関しては、上述の例 11 や次に挙げる例 12 のように、誰が何をしたかを叙述するだけの発話は日本語で 1 人で語ることができているが、例 10 のように詳しい叙述・描写が日本語では十分にできず、英語になってしまう。例 12 は、CL2 の連想語群からは、実体験ではなく想像したこととして、仕事仲間との酒の席で失態をしでかしてしまうことへの不安を想起すると語ったくだりである。つまり、留学後においても、発話しようとしているのは具体的・事実に基づく社会的関心事だが、日本語でそれを達成しようとする具体的な事実レベルの内容にとどまってしまうということが観察されたのである。

例 12：酔ってる時には、誰かが、危ない、こと、を、したら、次の日に、が、次の月曜日に、んー…あんまりよくない雰囲気をつ、作ります。[中略] 酔ってる人は、自分の体を後ろから、後ろの上から見てて、心配しています。え、酔わないで、え、それ、やらないで、気をつけて、と、自分に（なるほど）注意してる、幽霊みたい（笑）

5. 考察

以上の留学前・留学中・留学後のインタビューから見えることを 2 つの側面から整理したい。まず読解教材との向き合い方については、C は留学前から日本についてのステレオタイプ的な読解教材に対し、相対的な視点をもって向き合おうとする様子が観察できること、それが C 自身の家族からの影響や、幼少期からの外国語学習経験、居住環境、渡日経験などに基づくことが観察できる。一方、日本語力の面では、日本語母語話者との接触が頻繁であるにもかかわらず、文レベルの発話から段落レベルの発話への移行が見られず、より詳しい説明や叙述になると、調査者が文脈に合う適切な語彙を紹介したり、文脈を補うなどの介入をしたりしなければ、日本語母語話者に発話内容が伝わらない状況が続いたことが観察された。第二言語習得の分野において Regan, Howard, & Lemée (2009) や Tarone & Swain (1995) などが言語習得における母語話者とのコンタクトの重要性を報告しているが、C の事例からは、それだけでは日本語力が向上するわけではないことが指摘できよう。

C の日本語力の伸び悩みの背景を考える上で、日本語クラスへの評価が参考になるように思われる。C は、留学前は宿題の点から、留学中は与えられた教材のトピック、そしてそれにどう向き合うように授業で指示されるかという点から、日本語クラスへの消極的な評価を口にしている。ここから窺えるのは、C は自らの体験を踏まえて抽象度の高い思考をすることができてもそれを

表現する日本語力が伴わないが、一方で自分の文脈および好みと合致しない形で基礎的な言語力を向上させる学習法には積極的に向き合えないのではないかということである。

大学における日本語教育は“Japanese for academic purpose”を掲げてその方向性が模索されてきたが、日本留学試験が導入された2002年度以降は「アカデミック・ジャパニーズ」という語を用いて議論が活発化し、大学の講義を理解できる、大学でレポートや論文が書くことができるようになることに教育の焦点が絞られる傾向にある。そこでは学習者の日常の出来事を叙述し語り合う中で抽象的な問題に考察を深めていくことよりも、Cの指摘するような「問題に関する論議」が優先されがちなのではなからうか。本データは、そのようなアカデミック・ジャパニーズ志向の日本語カリキュラムがCの日本語学習のスタイルに合っていない可能性を示唆するとともに、Cの言語力向上に関わる要素として、より詳しい説明や叙述をする力があることを示している。

日本語学習者や留学生の増加とともに、多様な学習スタイルの学生がより顕在化しつつあり、ネットを介した独学による日本語学習から「教室での学習」に入る学生も増えている。語りたいたことがたくさんあるが日本語力は十分ではない学習者、教室で与えられる素材を学習の中心として据えるのではなく、学習の1つとして位置づける学習者の学びをどう促進するかが課題となっている。教室での日本語教育がこうした学習者への対応も望まれる中、自らの体験から生まれる思考を叙述する力をつけることが答えの一つとなろう。

一方、Cは留学後のフェイスシートに関するインタビューで、Cとは異なる大学に留学した同級生と、留学後の日本語のクラスで互いの体験を語り合ったことが面白かったと述べ、筆者らにも留学中に強く印象に残った体験として3度に渡る農作業ボランティアについて語った。しかし、例12からもわかるように、Cはそれを日本語で十分に語るができなかった。この直前の農作業に関する発話(例13)でも、農具や作物等を示す語彙が出てこず、Cのジェスチャーや文脈から筆者らが言葉を補足してなんとか会話が成立する形であった。つまり、ここでもCの叙述力不足が重要な要因となっていたのである。

例13：実は、四国は、その経験で、四国は…思い切り(うん)、思い切り、優しいところで(あー)、この人は、え、ぼ、僕は友達と、二人で、ボランティアして、四国にあんまり電車、バスも無いから、ヒッチハイク、しよう、と、しました(うん、した、うん)一人、の人は、どこか、高知から、出羽島の近く、には、その、journeyは、三時間かかって、一人は、一人の、じえき、たい(自衛隊↑)自衛隊の人は(へー)、高知に住んでても、たぶん、ふ、普通に、買い物をしていて、車で、僕と友達を、つれて、つれて、三時間後に、つれて、戻ってくれた↑(そう)(えー、すごい)日本語で、はな、説明、説明できません。He went to three hours out of his way, just take us somewhere and he had three hours back so it was six hours of extra travel, just to help us(へー)信じられなかった(あー)。何回も、あ、ここでいいですよ、ここでいいですよ、ここでいいですよ、あー、

いいよいよ、もうちょっともうちょっと（へー…よかった）うん、素敵（うん、そうね）うん。（いい経験したね）いいいけ、んー、日本の留学は、人に会うということ、いい経験ばかりでした（んー）。悪い経験は無かった。

池田（2014）や工藤（2009）では、留学体験を学習者の成長に生かすために留学後の振り返りの重要性が指摘されているが、Cの場合にもそうした機会があったことになる。しかし、Cの日本語力では、日本語で日本語教師以外の他者ととも留学体験について振り返ることは難しいことが予想され、留学体験を自らの成長に生かす機会を十分に活用できないという結果に陥る可能性が高い。留学体験による学びを効果的なものにするためにも、日本語を用いた振り返りの機会が留学後にある可能性を踏まえて、留学中の日本語クラスをデザインすることが必要であり、そこでの鍵を握るのも自らの具体的な体験から生まれる思考を日本語で叙述する力をつけるような活動であると言える。

以上、本稿では、読解教材から発想する日本のイメージについて留学前・中・後に PAC 分析を用いて縦断的に調査したデータのうち、英国からの一年交換留学生 C に焦点を当て、その発想には留学前から日本を相対化して見る態度や留学中の体験への言及が見られた点で筆者らの先行研究と合致しているが、それを表現する日本語力が調査期間を通じてあまり向上しなかったことを明らかにした。そして、C の事例を踏まえ、「留学の先」を見据えて、留学中に詳しい説明や叙述力を向上させる活動を日本語クラスに積極的に取り込んでいくことを提案した。

注

- 1) 留学中の居住形態の違いと日本語力向上の関係を論じた研究に姫野・佐藤（2012）がある。
- 2) 2005年5月27日異文化間教育学会プレセミナーでの講義（講師：井上孝代・末田清子・伊藤武彦）に基づく。
- 3) 協力者の表記のママ。紙幅によりデンドログラムは省略した。CLはクラスターの略。
- 4) 例示した発話の中の（ ）内の発話は調査者らの発話である。
- 5) XはCが留学前・留学後に居住する地域を指す。
- 6) YはCの留学先の大学名を指す。
- 7) 本論文は、平成23-25年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「留学経験から発想する日本語授業の新たな意義—PAC分析を活用した縦断的研究」（研究代表者：丸山千歌、課題番号：23520617）の取り組みの一部である。

参考文献

- 池田伸子（2014）「効果的な「海外留学研修」プログラムの開発に関する一考察」『ことば・文化・コミュニケーション』6、17-30。
- 工藤和宏（2009）「日本の大学生に対する短期海外語学研修の教育的効果—グラウンデッド・セ

- オリ－・アプローチに基づく一考察』『Speech Communication Education』22、117-139.
独立法人日本学生支援機構「日本留学試験とは」http://www.jasso.go.jp/eju/whats_eju.html
(2014年11月5日アクセス)
- 内藤哲雄(2002)『PAC分析実施法入門 [改訂版] 「個」を科学する新技法への招待』ナカニシヤ出版
- 姫野伴子・佐藤有紀(2012)「ホームステイ居住学生およびインターナショナル・ハウス居住学生の日本語語彙力調査結果最終報告」『ホームステイの効果に関する研究報告書』pp.43-68
- 牧野成一他(2001)『OPI入門』アルク
- 丸山千歌(2007)「日本語教材の文化トピックからの学習者の発想—学習者とのインタラクションの解明に向けたPAC分析の可能性—」小川貴士(編)『日本語教育のフロンティア』くろしお出版 pp.161-184
- 丸山千歌・小澤伊久美(2008)「PAC分析におけるフェイスシートの開発に向けた課題：日本語教材と学習者のインタラクションの解明に向けた研究のために」『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』15、3-18.
- 丸山千歌・小澤伊久美(2011a)「日本語学習者が読解教材から連想するイメージ—PAC分析法を活用した留学前・中・後の縦断研究から—」2011年度異文化間教育学会第32回大会、2011年6月11日(発表抄録集 pp.154-155)
- 丸山千歌・小澤伊久美(2011b)「同じ読解教材を刺激としたことがいかに連想到現れたか—留学生Fに対する縦断的PAC分析調査から—」第5回PAC分析学会大会、2011年12月17日(発表抄録集 pp.15-20)
- 丸山千歌・小澤伊久美(2013)「読解教材を刺激とした留学生の発想—日本人との接触や日本体験はどのような影響を与えているか—」『CAJLE2013 Proceedings』147-156.
- 丸山千歌・小澤伊久美(2014)「留学生の渡日前の留学経験が日本語読解教材の読みに何をもたらすか—日本語学習者ABに対する留学前・中・後のPAC分析インタビューから—」2014年度日本語教育学会秋季大会、2014年10月12日(予稿集 pp.19-22)
- Regan, V., Howard, M., & Lemée, I. (2009). *The acquisition of sociolinguistic competence in a study abroad context*. Bristol: Multilingual Matters.
- Tarone, E. & Swain, M. (1995). A sociolinguistic perspective on second-language use in immersion classrooms. *Modern Language Journal*, 79, 166-178.